

里づくり

人に学び、
地域に学び、
今できることから始める。

CONTENTS

- 地域づくりリレーインタビュー
株式会社北海道アルバイト情報社
総合企画部じもと情報発信室 マネージャー 伊藤新さん
- ふる水指導員レポート
栗山町 金丸大輔さん
- 事業実施地区紹介
上ノ国町上ノ国地区 桧山南部サヤエンドウ生産組合企画班
- トピックス

地域づくりリレーインタビュー

(株) 北海道アルバイト情報社 総合企画部じもと情報発信室

マネージャー 伊藤新さん

(株) 北海道アルバイト情報社で「いいね!農style」プロジェクトを担当し、毎月2万部発行するフリーペーパーの企画・制作の他、Webサイトや農styleファーム、イベント開催など様々な仕事をこなす日々。

農業の世界へ飛び込む

●一見、農業とは関係のなさそうな(株)北海道アルバイト情報社が、「いいね!農style」プロジェクトに取り組むことになったきっかけは?

弊社は、求人情報サービスが本業です。北海道にこだわり、道内の優秀な人材を道内の優良企業に繋げていくという仕事をしてきました。北海道の元気な企業のお世話になって、ここまで来たわけです。創業40周年が近づいてきた頃、「北海道に、何か恩返しになるようなことができればいいね」という社長の一言があり、北海道にとって重要な産業である農業の世界で何か恩返しができないかと「いいね!農style」プロジェクトを2009年にスタートしました。

●その後は?

たまたま僕のいた部署が、このプロジェクトを担当することになり、「なんとなく楽しそうだなあ」と思い手を挙げた

ら、僕が担当できることになりました。

農業は世襲制が根強く、求人広告として表には出ない部分も多く、最初は農業のことを何も分からない中でスタートでした。取材をして情報発信をすることは得意としていることですので、まずはWebサイトを立ち上げ、農業を頑張っている人を取材して情報発信することにしました。

農家さんに「仕事について教えてください」と取材に行く仕事ではなく自分の人生を語ってくれるんですよ。その頃、僕は40歳。そういう人生観の話を聞くのが心地良い年齢になっていて：農業って植物や動物という命を扱う仕事じゃないですか。そこには生きることの本質がたくさんあって、そこに真剣に向き合っている人たちの話なんて、今まで味わったことがなかったですね。それで、あつという間に「農の世界」に魅了されてしまいました。



農業の魅力をひたすら発信

●Webサイト以外にはどのようなことを?

畑を耕してみたら何か分かるんじゃないかと思いついて、2010年に自社農場を持ちたいと提案してみたら、会社がすぐOKしてくれたのです。で、いざやるとやっぱり大変で(笑)。取材先で「実は畑を始めたいんですよ」と言うと、農家さんがニヤリと笑って「大変だろ」みたいなの。それまでよりも農家さんとの距離感が近くなったし、とても勉強になっていきますね。

●他には何を?

新規就農希望者を応援するために、新規就農をした先輩農家10名に協力いただき、自治体の相談窓口ではなかなか聞けないようなリアルな話を聞ける企画を2013年に2回開催しました。新規就農希望者に情報を届けるのが難しかったのですが、25組ずつくらい参加してくれて。その中から新規就農を実現した人が何組も出たのが嬉しかったですね。また、当時から新規就農に力を入れていた栗山町農業振興公社が声を掛けてくれて、一緒に新規就農に関するWebサイトや冊子の作成、相談イベントの開催などを行いました。

栗山町の新規就農に関する
取組は3Pから

2011年2月から、毎年、フリーペーパーの発行もしています。今では「農style」フリーペーパー「みたいなの」認識されていますが、本当は、農styleって言うのはプロジェクトそのもののことなんです。でも、フリーペーパーが農styleの象徴になってくれているので、それでも良いのかなど。これを読んで北海道の農や食に、さらには農の仕事に興味を持つ人が増えてくれればと思っています。

たまに栗山町のように仕事として声を掛けてもらえることもありましたが、数年間はほとんど収益に繋がらず、Webサイトとフリーペーパーが少しずつ認知されていくだけでした。会社への利益はないし、フリーペーパーも広告ゼロで全て自社負担だし、会社がよく続けさせてくれたと思います（笑）。

●取材をされてきて、印象に残っている話は？

色々ありますが、最近ではファームレストランハーベストの仲野さんのお話です。「伊藤さんね、新規就農者にばかりスポットを当てているけど、先祖代々受けついできた農家もいる。それについてどう思っているんですか？」ってツツコミをいただいて。「新規就農者にとっては就農が1つのゴールだし、自分が食べていくことに一生懸命になるけど、農村ってそれだけじゃないんだよね。代々農家をやってきて、そこには開拓者が機械もない時代に木の根っこを一生懸命掘って平らにした土地があって。農業をやめないといけないようになった人から土地を受け継ぐときには、その人の気持ちとかそういう風に一生懸命開拓した土地だという歴史や想いも一緒に受け継がないといけない。農家は歴史の中で、みんなが地域で助け合ってずっと農村を守ってきているんだよね。それが農村だし、それがとても大事なことなんだよ。」と教えてくれて。その言葉の重さにご

く感動したんです。新規就農者が入って頑張って、地域を活性化することも、もちろん大事なことです。が、派手ではないかも知れないけれど、ちゃんと地道にその地域を守ってきた人がいることを忘れてはいけないんだらうな。V.O.I.9では、この記事が1番気に入っているんですよ。



フリーペーパーは、Web 上でも読むことができます。

フリーペーパーが 仕事のきっかけに

●今やフリーペーパーは相当な認知度になっている。

認知度が上がるにつれて、フリーペーパーを見て『いいね!農style』のようなやわらかい表現手法で、一般人にも伝わりやすい冊子を発行したい』とお仕事をいただけるようになってきました。

●例えば？

北海道立総合研究機構さんの「たべABO」は、難しい論文でまとめられていたこれまでの研究成果を、一般の人にも分かりやすくしたものです。「今まで

難しい顔で難しい話をしていた研究者が、この本を片手にニコニコしながら一般人の人に自分の研究を易しく話せるようになった」と評判です。全国的に見てもこういう冊子はないみたいですね。一般人の人に分かりやすく書いていくけど、研究者が読んでも「なるほど」となる内容に仕上がっていて、どちらが読んでも楽しめる冊子です。

また、ホクレンさんと一緒に、アグリポートの別冊として「パートさん採用・受け入れガイドブック」を作りました。実際にある農家さんが、人が来なくて困っていた時に、どうすれば人が来てくれるか考えて、就労時間を細分化したり、作業を分解して分かりやすくしたりすることで、たくさんの応募があったという成功例をもとにしていて、主婦パートや学生アルバイトを募集する時のノウハウが詰まったガイドブックです。2020年2月には、農福連携に関する同じようなガイドブックを発行する予定です。



読みやすい! 分かりやすい! ためになる! どちらも Web 上でも読むことができます。

これからの取組

●今後の目標は？

会社としての目標は、「北海道の『楽しく働く』を増やす」ことです。単にお金を稼ぐための手段としての仕事ではなく、毎日生き生きと楽しく暮らしている働き方を北海道に増やしていきたいです。この目標は、農業の世界とすごく合致していると思うので、農業も含めて北海道にそういう働き方を増やせたいと思います。

●「いいね!農style」プロジェクトとしては？

ここ数年で、やっと本業である求人につながるような取組もできるようになってきました。2017年秋にジョブキタで北海道の一次産業専門の求人コーナーが立ち上がって、農業界の人材不足も少しずつ応えられるようになっていきます。最近、農家さんの一番の課題は採用だという声が多く、僕らの本業で、農家さんの役に立っていきたいですね。「人を募集するために大切なこと」などもお伝えしながら、農場に人が集まるように、集まってくれた人に長く働いてもらえるようなお手伝いができたらと考えています。

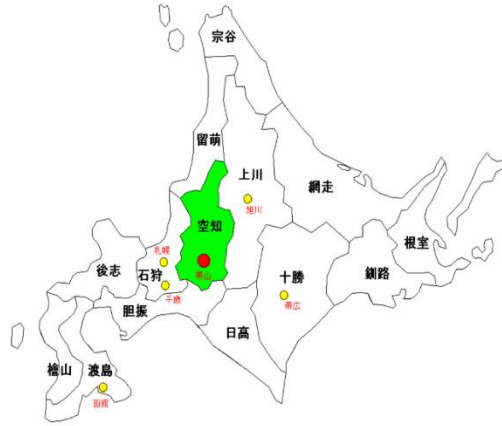
●伊藤さん、貴重なお話をありがとうございました!

ふる水指導員レポート

栗山町 金丸大輔さん

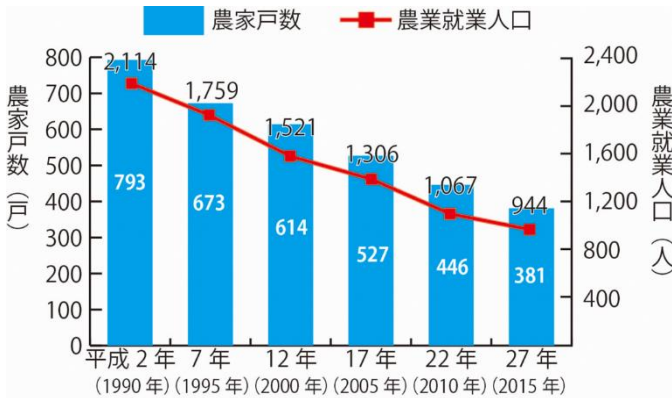
北海道で多彩な農スタイルを

〜栗山町における新規農業参入支援の取り組み〜



栗山町は空知振興局管内南部に位置する

農家戸数や耕作農地面積の減少は全国的な課題となっており、農業を基幹産業とする栗山町においても例外ではない。2005年に527戸だった農家戸数は、2015年に381戸まで減少（図1）。また、このま何も手を打たなければ2026年には65歳以上で後継者のいない農家が耕作する農地面積が1,334ヘクタール（全農地の約25%）になると推測される。



【図1】農家戸数と農業就業人口の推移

今後離農により放出される農地を守り、農村地域を活性化させるための有力な対策の一つとして、2011年から農外からの意欲ある新規就農希望者の受け入れ・育成に取り組んでいる。



金丸大輔 指導員

◇就農支援の特徴と

基本スタンス

栗山町は、水稲、小麦、大豆、種馬鈴しよなどの土地利用型作物から、トマト、イチゴ、メロン、アスパラガスなどの施設園芸作物まで多種多様な農産物を生産している。また、札幌市から車で約60分、新千歳空港から車で約40分という地の利を活かした直売や都市農村交流も活発に行われ、生産だけに留まらない多彩な農業経営に挑戦できる環境にある。

このような特長を活かした就農支援を行うため、各農業関係機関・団体により組織される一般財団法人栗山町農業振興公社がワンストップ窓口となり、地域農業者の協力の下、「幅広い受入間口と多彩な就農実現」を目指した取り組みを進めている。就農希望者は、農業や北海道での暮らしに夢や希望を持つ一

方で、将来の経営と新たな地域での暮らしに對する不安も抱えている。時間をかけた情報交換や作業体験・移住体験などを経て、「栗山町なら自分のやりたい農業が経営できるか?」「家族と共にどんな暮らしをしていきたいか?」など希望者の目標を具体化し、希望者の現状から実現可能な就農計画をプランニングしている（表1参照）。

【表1】栗山町における農外からの新規就農希望者受入れの基本スタンス

項目	内容
品目	栽培品目の限定はしない。(多種多様な品目の栽培が可能)
年齢	原則として国の支援制度の対象年齢としますが、本人の意欲と条件等により多様な対応。
性別	区別はせず、多様な就農の可能性を検討。
家族構成	同居家族の有無の指定はしませんが、日々の農作業と営農の支えとして家族は心強い存在。
自己資金	受入条件とはしない。しかし、就農は起業することであり、営農と生活資金、或いは住宅購入の資金は、必ず必要。
研修先	新規就農者受入育成に関心が高い農家。
研修人数	受入人数の限定はしない。(研修者用住居の入居範囲数)
受入決定	本人の意欲と体力、家族、体験来町、面談によりマッチング。
コンセプト	「幅広い受入間口と多様な就農」です。

◇これまでの取り組みと成果

就農希望者が目指す経営スタイルは水稲、和牛繁殖、トマト、イチゴ、メロンなど多彩で、就農までの研修方

法も、後継者がいない農家の経営を引き継ぐ方法や法人雇用から独立を目指す方法、地域全体で育てる方法など、就農希望者と受け入れ農家それぞれのニーズをマッチングさせ柔軟に決めている。

例えば、2015年に施設園芸で独立就農したA氏(5人家族)の場合、古くから野菜栽培の先進地域で専門家が多数H地域で就農研修を行ったが、当時のH地域は農家15戸のうち、65歳以上の経営者が11戸と農家の高齢化が最も進んでおり、公社では地域の将来像について懇談する場を設け、新規就農者の受け入れの必要性について協議を進めていた。

公社仲介の下、数回にわたる体験研修やA氏を交えた地域との協議によって研修受入れ体制が検討された。指導する農家を固定して研修を行い、H地域全体でA氏を受け入れることとなった。現場でなければ学べない生産技術や地域活動についてはH地域が中心となり指導し、その他の営農に関する研修は公社が中心となって指導した。A氏は消防団活動など農業以外の地域活動にも積極的に参加し、地域との信頼関係構築に努めながら農業経験を積んでいた。

新規就農者の多くが不安に思う就農先農地や住宅については、地域から情報を得て、離農後も在村していたB

氏(90代)所有の農地と住宅の購入を検討することになった。B氏はかねてから老人ホーム入居を希望していたことから、入居に関する調整と農地等の売買の協議を並行で進め、双方のニーズを満たす形で、優良農地を次世代に引き継ぐことができた。A氏は自身の夢であった農業者としての第一歩を踏み出し、H地域は新たな家族の受け入れによって活気を取り戻しつつある。

これらの取り組みにより、2019年4月1日までに15世帯(家族含め47人)が就農し、3世帯(家族含め5人)が就農研修中だ。



新規就農者と研修生による交流会の様子

新たな人材が農村地域に入ること、小学校や消防団活動などの地域コミュニティが活性化し、農業以外の観点でも明るい話題が生まれている。農業が産業として成り立つために、生産性を向上させ、規模拡大を目指すことが、これまでの北海道の主流だったが、農村を廃れさせないためには、地域の農家と共に農外からの就農希望者を受け入れる取り組みは必須であり、これまでの成果からもその必要性は地域に浸透しつつある。

◇今後に向けて

公社では「出向く面談」を積極的に行い、2018年度末までに延べ1,237人の就農相談を受けた。しかし、就農意欲は高く、人柄も良好と思われても、農業経験が無い、起業する意識が芽生えていない就農希望者が多いのが現状だ。「幅広い受入間口と多彩な就農実現」を目指すためにも、就農希望者がこれまでの人生の中で培ったスキルや発想を活かし、多彩な農業や暮らしが実現できる環境づくりを、今後も進めていく方針だ。



就農相談イベントのチラシ



就農相談の様子

【一般財団法人 栗山町農業振興公社】
2004年に設立。栗山町農業の構造改革と担い手づくりのための事業推進と農業振興が目的。農業関係機関・団体のトップが役員となり、スタッフは町、農協(JA)、農業委員会、土地改良区からの職員出向で組織されている。
(<http://kuri-agri.org>)

【栗山町の新規就農者支援に関するホームページ】

新規就農した人や、研修生を受け入れた農家へのリアルインタビューや、就農支援の概要等をまとめたホームページ。「じっくり聞いて、しっかり比べて。栗山人のホンネ。農業人のホンネ」
(<http://kuri-agri.org/syunou/>)

事業実施地区紹介

上ノ国町上ノ国地区

桧山南部サヤエンドウ生産組合企画班

上ノ国町は、渡島半島の西南、桧山振興局の最南端に位置しています。「北海道和人文文化発祥の地」と呼ばれ、あちこちに歴史遺産があり、北海道中世史を体験できます。

また、良質な山海の幸や、かたこもち、鯨汁そうめん等の伝統食等々「食」も豊富です。その中でも「さやえんどう」は町を代表する農作物であり、品質もよく市場関係者から高い評価を得ており、産地としても全道屈指の規模を誇ります。生産出荷が始まり39年（令和元年現在）の歴史もありますが、「上ノ国町＝さやえんどう産地」を知る町民はあまり多くない状況でした。

「町の人に、さやえんどうのことをもっと良く知ってもらおう！」と、平成28年にサヤエンドウ生産組合、町役場、農協が中心となって、「桧山南部サヤエンドウ生産組合企画班」を発足し、農家を作るさやえんどう料理のレシピ化や、地元料理店の協力で新しい食べ方の検討等活動を始めました。



さやえんどう餡を使った「きぬさやだいふく」は、道の駅で好評販売中！



上ノ国サヤエンドウ料理検討会の様子。普段は脇役のさやえんどうをたくさん食べてもらうため、さやえんどうが主役になるレシピ開発は大切です。

平成30年に入ると「北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業の地域活動支援事業」を活用し、活動の幅を広げました。

町内や農協のイベントに参加して、レシピ集配布や簡単な料理試食を通じ産地PR、地元和菓子屋の協力でスイーツをテーマに料理教室の開催をしました。

また、地元高校と協力して、家庭科の授業の一環（フードデザイン授業）で料理づくりもしました。令和元年には町内の各老人会長を招き、生徒のアイデアが光る身体に優しい料理が振る舞われました。町の若い人とお年寄りがさやえんどう料理を介して関わる意義深い取り組みとなり、新聞やTVでも紹介されました。

地元和菓子屋が試作を繰り返し、きぬさやえんどう餡の大福（商品名「きぬさやだいふく」）も、令和元年ついに完成しました。上ノ国町の道の駅で販売され、発売初日は完売、現在も売れ行きは好調です。上ノ国の新しい味の誕生です。取組みを始めた頃より、参画してくれる人が少しずつ増えてきました。今後「継続は力なり」でコツコツと楽しく活動していきたいと思えます。



上ノ国高校の学生が考案したさやえんどう料理を老人会の皆様に振る舞いました。



「上ノ国町＝さやえんどう産地」だと知ってもらうために、町内の親子を対象とした「じょぐら料理教室」を開催。子どもたちは、楽しみながら、味わいながら、さやえんどうのことを学びました。

「新・田舎人」の取材で 由仁町由仁地区「WE AVE」の皆さんに インタビューが行われました。

「新・田舎人」ふるさと水と土基金活動事例紹介の取材で、由仁町の女性グループ「WE AVE」の皆さんにインタビューが行われました。

「WE AVE」は、40才までの『農家の嫁』が集まったグループです。由仁町外から嫁いできた町内に知人の少ない女性が、地域や農業への理解を深め、仲間づくりを行うことを目的として2013年に結成されました。

「WE AVE」では、町内の子どもを対象にしたクリスマスイベントや由仁町周辺や札幌での野菜の直売、乾燥野菜の製造・販売などの活動を行い、楽しみながら由仁町の魅力を発信しています。



今回は「WE AVE」の月例会に合わせ取材日を設定して、「WE AVE」結成のきっかけや現在の活動、今後の目標などについてのインタビューや写真撮影が行われました。

当日は、ほとんど晴れ間はなく、大荒れの天候でした。しかし、集合写真を撮るときはスッキリと晴れ渡り、外で最高の集合写真を撮ることが出来ました。それを見て、「勢いのあるグループには、天候も味方してくれるのだなあ」と思いました。

そんな「WE AVE」の皆さんの記事は、「新・田舎人」のVol.103（2020年3月発行）に掲載予定です。お楽しみに！

新任指導員紹介

鷹栖町 中江 正博 さん

土地改良区職員を定年退職し、現在、地区町内会連合会役員として活動しております。指導員就任にあたり、生まれ育った鷹栖町の自然や農産物のPR行い、指導員間の交流を深め、全道各地の活動を学び、地域に発信して行きたいと思っておりますので宜しくお願いします。



表紙紹介

今回は、栗山町鳩山地域が表紙です。今号のふる水指導員レポートを寄稿したくださった金丸指導員から写真をご提供いただきました。新緑の季節を迎えたのどかな農村を撮影した素敵な写真です。

栗山町の農村地域は、北大農場、湯地農場、鳩山農場などの大農場群が大規模な土地払い下げを受けて開発されました。写真の鳩山地域は元内閣総理大臣である鳩山由紀夫氏の曾祖父が拓いた鳩山農場が、そのまま地域名になった場所だそうです。

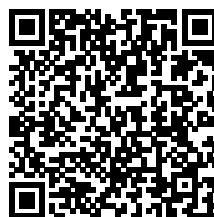
かつて、鳩山由紀夫氏が内閣総理大臣になった際には、鳩山地区の鳩山神社が観光場所としてとても盛り上がったそうです。



あの人たち、活動をすごく頑張っているから応援したい！
行政から支援を受けられるようなものはないかな…？
地域にそんな方がいらっしゃったら、
是非ふる水事業を
おすすめしてください！
事業が気になる方、
やってみたい方がいらっしゃれば、
担当者が御説明に伺います！



ふる水パンフレット



ふる水ホームページ

「農たび・北海道」公式 Twitter 開設！

農山漁村で食べた、見つけた、体験したことを、左下のよう
な#(ハッシュタグ)をつけて投稿してください！「いいね」や「リツ
イート」で、皆さんの情報発信と農山漁村を応援します！



農村ツーリズム
農たび北海道
森たび北海道
浜たび北海道



@notabi_hokkaido

食べて、泊まって、体験して…

そこにしかない魅力を活かし、

地域が一丸となって観光客を受け入れる農村ツーリズムを

“農たび・北海道”の愛称で道は応援しています。

Facebook でも引き続き情報発信中！



農たび・北海道